

# 鈴木大拙における白隠禪師の理解

竹下ルツジエリ・アンナ

## 一 はじめに

本稿では、鈴木大拙（一八七〇—一九六六）が白隠禪師（二六八五—一七六八）とその教えをどのように理解したかを調べた。そのきっかけとなったのは、平成二九年度日本印度学仏教学会第六八回学術大会での石井修道先生による「鈴木大拙と『新宗教論』」というご発表である。ご発表の際に石井先生は鈴木大拙の白隠理解について問いかけをし、その問いかけに答えてみることにした。

筆者にとつては、鈴木大拙先生の思想についての小論は初めての挑戦であるが、白隠禪師の研究は約二五年間続いている。初めて白隠禪師のことを知ったのはヴェネツィア大学の学生時代に鈴木大拙の *Essays in Zen Buddhism: Second Series* (Suzuki (1933) 2008) の伊訳版 D. T. Suzuki, *Sagzi sul Buddhismo Zen II* (1977) を読んだ時のことであった。

## 二 鈴木大拙の作品における白隠禪師の解説

鈴木大拙は、多数の著作のなかで、白隠禪師についてそれほど多くを語ることがなかった。以下、主なものを列挙し、分析してみる。

①「白隠禪につきて」『禅道』百号・白隠研究号（禅道会、一九一八年二月五日、十〇—十五頁）に鈴木大拙の記事がある。

ちょうど百年前に、白隠禪師一五〇年遠諱事業により刊行されたものと思われる。釈宗演老師（二八五六—一九一九）による最初の記事の次に、当時「禅道」の主幹であった鈴木大拙（四八歳）の「白隠禪につきて」という記事が記載せられている。その中で、まず大拙は次のように書いた。

白隠和尚につきては書くべきこと仲々少なからぬと思う。否、自ら進んで書いて見たいと思う処も随分ある。但研究がまだ何にも出来て居ないので、今回の間には合い兼ねる。（『禅道』、一二三頁）

このことから、当時の大拙は本格的な白隠研究には取り掛かっていたいなかったことが明らかになる。大拙のその記事の主な内容は、公案と公案体系の説明および看話禪と黙照禪の相違についてのものである。それと同時に大拙は白隠を大きく評価する。「白隠は看話禪を大成したと同時に支那禪を日本化した処がある。」（同一二頁）おそらくその時に大拙は、白隠の多数の仮名法語だけではなく、「隻手音声」の公案を考えていたであろう。宋代禪の代表の一人である大慧宗杲（二〇八九—一二六三）によって創出された看話禪は、日本に伝えられてから、江戸時代に白隠禪師により体系化された。基本的には公案というものは宋代以前に行っていた禅僧侶の問答から由来しているが、白隠の「隻手音声」<sup>(1)</sup>だけは、もともと公案として日本で創造された。大拙は若い時から鎌倉の円覚寺で、まず今北洪川老師（一八一六—一八九二）について、そして老師の遷化の後には彼の弟子であった釈宗演老師について参禅をし、初めに「隻手音声」<sup>(2)</sup>、その後「趙州無字」、そしてまた「隻手音声」を授けられたので、「禪道」の記事に関しては自分の公案の実験という立場から記述していたものと思われる。この記事ではまた、臨濟禪は「白隠禪」と呼ぶべきであり、「臨濟宗の人々は、悉く白隠的々の子孫である」（『禪道』、一〇頁）と強調する。

② Suzuki (1933) 2008 に鈴木大拙は何回も白隠禪師の話を

紹介する。その主な内容は『遠羅天釜』によるものである。『遠羅天釜』は、三つの手紙で構成されている書である。そこにはさらに、漢文体で書かれた序文と下之巻の付録が含まれている。これとは別に、その最後に「念仏と公案と優劣如何という書に答ふる書」を収録する『遠羅天釜続集』という書があり、その中には、斯経慧梁（？—一七八六）という白隠の高弟の一人が書いた原漢文体の追加文が含まれている。大拙は様々な著作において、『遠羅天釜』に記述された白隠自身の見性体験をしばしば引用する。この時点では、見性体験に不可欠である「疑団」はその心理的な面が強調されているが、白隠の教えにとつて非常に重要である「悟後の修行」の紹介はほとんど見られない。

またSuzuki (1933) 2008においては、次の箇所が興味深い。白隠による「無字」の扱い方を記述する時に、大拙は注に次のように書いた。

この本が出版されていた時に、京都にある妙心寺のコウソン・ゴトウは未だ未版である白隠の手紙が存在することを知らせてくれた。ここでは（白隠は）「無字」の代わりに、最近「隻手」の公案を与え始めた。なぜならば、「無」より「隻手」の方がより早く「疑団」を起すからである。

(D. T. Suzuki, 1977, p. 184 により引用翻訳)

上記のコウソン・ゴトウという人物とは『白隠和尚全集』

(龍吟社、全八巻、一九三四)の編纂代表者であった後藤光村氏のことである。実は『白隠和尚全集』は昭和九(一九三四)年に出版されたため、Suzuki (1933) 2008の作成・出版の際にまだ存在していなかった。『白隠禪師集』(常磐大定校訂、大日本文庫刊行会、一九三八)も発行されていなかった。こういうことから明らかになったのは、現在と違って当時すべての白隠の作品は簡単に入手できなかったということである。

ここで、鈴木大拙における白隠禪師の理解に関わる興味深い話をもう一つ、挙げる。秋月龍珉が大拙先生に頼まれた時のことである。

白隠さんの年譜に、四十代だったかと思うが、夢に亡母が、片一方の袂から出した鏡は真黒で、また片一方からは明鏡が出て山河万象を照らしたと書いてあった。この全文を写して送ってくれたまわぬか。この夢は公案として、しらべ、させるか、如何。自分としては、ここに大なる意味を見付ける。(中略) いずれまた(一九六一年七月)

(秋月二〇〇四、二三一一―二三三頁)

実は、この話は『白隠和尚年譜』の四一歳(白隠和尚一九六七、第一巻四一―四二頁および芳澤二〇一六、一六三頁)のところであり、さらに『遠羅天釜』にも表れる。数年前から『遠羅天釜』の伊訳を行っている筆者にとつては、これは印象的な話である。白隠自身は、この夢について二回しか述べ

ていないにもかかわらず、これを大きく重視していたように思われる。『遠羅天釜』巻之下では次のように記述されている。

一夜、夢ニ吾ガ母、紫絹衣ヲ以テ予ニ附ス。提起シテ兩袖甚ダ重キコトヲ覺フ。之ヲ探ルニ各オノ一面ノ古鏡有リ。經五六寸可リ、右手ナルハ光輝心肝ニ透徹シ、自心及ビ山河大地、澄潭ノ底無キガ如ク、左手ナルハ、全面一點ノ光耀無ク、其ノ面新鍋ノ未ダ火氣ニ觸レザル者ノ如シ。忽然トシテ左邊ノ光輝、右邊ニルコト百千億倍ナルコトヲ覺フ。此レ従リ萬物ヲ見ルコト自己ノ面ヲ見ルガ如シ。初メテ、如來ハ目ニ佛性ヲ見ルトイウコトヲ了知ス。後來、因ミニ碧岩録ヲ取りテ讀ムニ、與從前ノ所見ト大イニ異ナリ。

(芳澤二〇〇一、四三四―四三五頁)

「如來ハ目ニ佛性ヲ見ル」という表現の出典は白隠がよく引用する『涅槃經』である。また、「自己ノ面ヲ見ルガ如シ」という話は、白隠自身が、『荊叢毒藥』に含まれている洞山五位の「偏中正」<sup>(3)</sup>のところにも述べている(芳澤二〇一五、乾六二二頁)。またこの夢の後に、白隠の『碧巖録』に関する所見は大きく変わったという(芳澤二〇一六、一六三頁)。このようにして、鈴木大拙は白隠禪師の思想の重要な点に触れ、白隠のことをより深く理解しようとしていたと思われる。そのことを大拙は、「自分としては、ここに大なる意味を見付ける。」という表現で表している。

③ 古田紹欽による『鈴木大拙全集』第一巻の「後記」では、『禪思想史研究第一』（『鈴木大拙全集（新版）』第一巻、岩波書店、二〇〇〇）は一九四三年に出版されたと書かれている。ここでは「日本禅における三つの思想類型——道元禅、白隠禅、盤佳禅——」が挿入された。その目的は最初の文章から明らかになる。

禅思想史—殊に日本禅における盤佳禅の意義と地位とを考えて、その特性につき十分鑑賞をしようと思うときは、日本禅における三つの異なった思想類型とでも云うものを区別しなければならぬ。

（『鈴木大拙全集』第一巻、五七頁）

結局のところ、盤佳禅の特徴をよりいっそう引き出すための企てのように見えるが、同時に、この三つの思想類型においては、大拙の実際の見性体験が大きな役割を持ったと思われる。

この論文にもしばしば『遠羅天釜続集』の文章が引用され、そこに鈴木大拙なりの看話禅の心理的なアプローチと説明が見られ、これによって「心理禅批判」という大拙に対する反論が多く生じた。秋月龍珉は次のように説明する。

鈴木先生の今日禅に対するいま一つの批判は、その見性教育の心理主義的傾向についてであります。（中略）わたくしは先に、今日の禅の心理主義的傾向は、鈴木先生にもその責任の一端があり、さ

らにその源流は白隠禪師にまでさかのぼることができると思しました。（秋月二〇〇四、一六三頁および一七七頁）

特に外国人読者に誤解を与える可能性があるため、秋月は大拙先生に何度もこのことを伝えたようである。これに対して大拙はこれを認めた様子で肯い、「だからわしはこのごろ特に心理的経験だけではダメだ。哲学がなければいかん」（同一八五—一八六頁）と強調したようである。当然のこととして、鈴木大拙にも、時が経つにつれて、思想の変化が現れたと考えられる。

また、『鈴木大拙全集』第一巻に「不生禅と白隠禅附、念仏禅」という論文も見られる。白隠禅と念仏禅の比較が加えられて、説明に当たって特に『遠羅天釜続集』の「念仏と公案と優劣如何」という書に答ふる書<sup>1</sup>が引用されている。

最後まで鈴木大拙は、宋代の看話禅の延長として見ていた白隠の禅より、唐代禅により近い盤佳の思想の方を、好んだという印象は強い。

④ 『金剛経の禅』（『鈴木大拙全集』第五巻、二〇〇〇）には「洞家の五位」が見られる。公案とされている「洞山五位」とは、元の中統元年（一二六〇）に晦然が序を書いて編集刊行した『重編曹洞五位』『洞山五位顕訣』に述べられた偏正五位と、『禅林僧宝伝』（二三三一年刊）「華嚴隆禪師」項に記載

され、洞山の著語的説明と頌で示された功勳五位とがある。

偏正五位は、洞山良价によって作られたものであり、その宗旨を五項目に分類し、それに弟子である曹山本寂（八四〇—九〇二）が註釈をつけた。

偏正五位は、洞山では概ね①正位却偏、②偏位却正、③正位却来、④偏位中来、⑤相兼帶來としている。そして、曹山に到って、各位の項目が①正中偏、②偏中正、③正中来、④偏中至、⑤兼中到と三文字ずつに整えられた。そして、それにその趣旨を各位毎に七言三句でまとめた逐位頌を示して分析している。それに対してまた白隠は、それぞれの著語を加えた。白隠自身は様々な著作の中で五位について述べているが、とくに『荊叢毒蕊』第三卷、すなわち「洞上五位偏正口訣」において、詳しく明らかにしている。

また、白隠の法嗣東嶺円慈（二七二—一七九二）によって著された『五家参詳要路門』卷三（白隠和尙一九六七、二二四—二二〇頁）の中にも、同じ「洞上五位偏正口訣」が載せられている。しかしここでは、白隠による「口訣」は東嶺によって若干修正されている。「口訣」の中で白隠は、偏正五位の重要性を主張しながら、同時にその複雑さも認めている。

鈴木大拙は特に最後の「兼中到」の白隠によって付けられた著語を好んだ。「兼中到。有無に落ちず、誰か敢えて和せ

ん。人人尽く常流を出でんと欲す、折合、還つて炭裡に歸して坐す。」に白隠禪師は『荊叢毒蕊』において次のような著語を付けた。「徳雲の閑古錘、幾たびか妙峯頂を下る。他の癡聖人を備うて、雪を担つて共に井を填む。」（芳澤二〇一五、六三八頁）と。鈴木大拙は白隠の教えの中で特にこれを非常に高く評価した。秋月によると、大拙は次のように語った。「五位の「兼中到」の著語にこの句をおいたのは白隠の大見識だ。そしてそれは禪者のいう跡を払えだ。」（秋月二〇〇四、一六二頁）また、「ただ目茶苦茶に働くのだ、働いて働いて働きぬくのだ。その意味でわしは、白隠禪師が五位の「兼中到」に著語を置き直した見識を高く評価したい。外のこととはともかく、あれだけでも白隠は偉いと思う」（同一五八頁）

本来は『荊叢毒蕊』に含まれている五位の説明の前半部分において、もう一つの重要な思想は、偏正五位と四智（大円鏡智、「平等性智」、「妙觀察智」、「成所作智」）との組み合わせであった。<sup>4)</sup>四智とそれに転換された唯識は白隠禪師の教えを理解するに当たって非常に重要な点であるが、残念ながら大拙はこれについて触れていない。

⑤最後に『禅思想史研究第四』（『鈴木大拙全集』第四卷）においては、白隠の理解に関わる二つの重要な論文が含まれている。「槐安国語を読みて」および「禪と白隠」である。鈴木大拙の「槐安国語を読みて」は白隠の思想を理解する努力

に当たつて最も評価すべきものだと思う。

『槐安国語』（二七四九）は、白隠禪師が、大徳寺開山宗峰妙超の『大灯国師語録』に評唱と著語を付した著作である。これは、白隠の理解に当たつて不可欠な著作である。『槐安国語』については、大拙とその道友であつた西田幾多郎（二八七〇—一九四五）との手紙のやり取りが残されてい<sup>(6)</sup>る。しかし「槐安国語を読みて」は、昭和二一（一九四六年、つまり西田の死および第二次世界大戦の終了から一年後に、『哲学季刊』（第一冊）に初めて発表になつた。その中で大拙は、最初から最後まで、白隠の禪に対する立場を明らかにしている。一方では、「日本における禅思想史の或る一面は『槐安国語』底においてその頂点に達して、もはやこの方面では進歩すべきものがない」（鈴木大拙『鈴木大拙全集』第四卷、三七頁）と言いながら、他方では「これからの禅思想は他の方面に向かつて新しき途を拓くべきであろうと考へ（中略）」「白隠禪師がなくなつてから百五十年以上を経過した今、さういつまでも旧態依然たるべきであるまいと思ふ」（同）と述べる。

大拙は、『槐安国語』の難しい文を分析そして評価をしながら、論文の所々に「近代人の思想の動き方には、徒らに宋代の風習を逐ふだけではないものがあると、自分は信ずる」（同五六項）や「日本禅における五山時代の暗黒を繰り返して

はならない」（同五九頁）というような意見を反復して表す。

また、「禪と白隠」は、元々『白隠』（竹内一九六四）という白隠の禅画を紹介する作品の最後の後書きであつたが、その中で白隠の禅画についての解説はほとんど見当たらないのが、不思議である。この『白隠』という禅画・墨蹟集は大拙が亡くなる二年前に出版された本である。

### 三 おわりに

鈴木大拙は自分の著作において所々に白隠禪師の思想と教えについて記述している。ところが、鈴木大拙自身の考えを証明するために白隠の言葉が用いられているという印象は場合によつて与えられている。それと同時に、白隠の思想の最も深い面も把握されている点が見られる。しかし、鈴木大拙先生のスケールは非常に大きくて、世界に禅を紹介・説明する偉大な使命があつた。その禅が白隠禪師の伝統的な禅に必ずしも一致しなかつたことは当然であると筆者は強く思ふ。そして、大拙が大いに気にしていたと思われることは、生き延びるためにどうしても必要とする現在の禅の「パラダイム転換」的な変化であつた。それでも、しかし白隠と鈴木大拙においては、慈悲の理解と実践および四弘誓願に対する思いと理解は、大きく共通すると思われる。そして二人とも、周りにいた人たち、つまり白隠禪師は僧侶だけでなく大衆に

も、鈴木大拙は日本人だけでなく外国人にも、創造的な方法で多数の限界を超えながら、禅の教えを広げるために膨大な努力をした、と筆者は強く思う。

1 白隠と公案については、ルツジェリ・アンナ『公案の思想的研究——白隠慧鶴を中心として——』博士論文（大阪府立大学、二〇〇一）を参照。また、秋月龍珉『公案——実践的禅入門——』（筑摩書房、二〇〇九）を参照。

2 秋月龍珉『世界の禪者——鈴木大拙の生涯——』（岩波書店、一九九二）一三九頁。

3 洞上五位については、本稿の二—③を参照。その他、アンナ・ルツジェリ『白隠慧鶴における洞上五位の「考察」』（『禅学研究』第七九号、二〇〇〇、一九九—二二二頁）。アンナ・ルツジェリ『白隠と現代の公案の問題——「十牛図」および「洞山五位」を通して——』（『人間文化科学研究集録』第十号（大阪府立大学）、二〇〇一、五九—六九頁）。

4 洞上五位と四智の相当については、アンナ・ルツジェリ『白隠の唯識観——「四智辨」を通して——』（『花園大学国際禅学研究所論叢』第二号、二〇〇七、一五一—一七九頁）。また、近藤文剛『白隠禅師における四智弁について』（『東洋大学紀要』一七号、一九六三、一九—三八頁）。さらに、白隠の四智について触れるのは、常盤義伸『白隠慧鶴の『偏正秘奥』理解と『隻手音声』公案』（『花園大学研究紀要』第二二号、一九九一、六三—一三三頁）。

5 竹村牧男『西田幾多郎と鈴木大拙——その魂の交流に聴く——』（大東出版社、二〇〇四）一五六—一五七頁を参照。

鈴木大拙における白隠禅師の理解（竹 下）

〈参考文献〉

Suzuki, Daisetsu Teitaro. 1977. *Saggi sul Buddismo Zen II*. Roma: Edizioni Mediterranee.

Suzuki, Daisetsu Teitaro. (1993) 2008. *Essays in Zen Buddhism: Second Series*. New Delhi: Munshiram Manoharlal Publisher.

鈴木大拙『白隠禅につきつ』『禅道』百号・白隠研究号、禅道会、一九一八

鈴木大拙『鈴木大拙全集』岩波書店、二〇〇〇

白隠和尚『白隠和尚全集』龍吟社、一九六七

芳澤勝弘編著『新編・白隠禅師年譜』禅文化研究所、二〇一六

芳澤勝弘訳注『荆叢毒蕊』乾、禅文化研究所、二〇一五

芳澤勝弘訳注『白隠禅師法語全集』第九冊、禅文化研究所、二〇〇一

道前慈明訓注『槐安国語』全二巻、禅文化研究所、二〇〇三

竹内尚次編著『白隠』筑摩書房、一九六四

秋月龍珉『鈴木大拙』講談社学術文庫、二〇〇四

〈キーワード〉 鈴木大拙、『禅思想史研究』、『金剛経の禅』、白隠

禅師、見性体験、公案、洞上五位、『遠羅天釜』

『槐安国語』

（京都外国語大学准教授、博士）